

## Introduction to an Intellectual History of the “Happiness” (幸福・幸・さいわい・しあわせ) Discourse in Modern Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, みち子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1721">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1721</a>

# Introduction to an Intellectual History of the “Happiness” (幸福・幸・さいわい・しあわせ) Discourse in Modern Japan

KATO Michiko

## Summary

When did the word “happiness (幸福: *kōfuku*)” first appear in Japan and when did it come to be used in the modern sense? To answer this question, I envision an intellectual history of the Japanese “happiness” discourse. In this study, as the first step, I have provided an overview of the history of the word “happiness” in Japanese. This attempt positions the “happiness” that prevails in modern times within history. The word “happiness” is a concept that has been popular as a translated word since the Meiji era. The Japanese words *shiawase* (しあはせ) and *saiwai* (さひはひ) in the pre-modern period meant “luck,” “events that happen by chance,” or “things that are bestowed by God as good luck,” which differs conceptually from the modern concept of happiness.

The translated word “happiness (幸福: *kōfuku*)” is a concept that was introduced in Japan by the Enlightenment thinkers in the early Meiji era along with the concept of human rights. They also introduced the words “individual” and “society,” concepts that did not exist in pre-modern Japan. Works such as *Western Affairs* (written by Yukichi Fukuzawa and published in 1866), *Self Help* (translated by Masanao Nakamura and published in 1970), *The Elements of Moral Science* (translated by Taizō Abe and published in 1974), led to the proliferation of the word “happiness.” However, this word was not simply imported from Western thought but was remade in the translation process and accepted as an image of “happiness” that was backed by the national ideals of the Meiji era.

近代日本における「幸福」言説の登場  
——「幸福」言説の思想史への序論——

加藤 みち子

# 近代日本における「幸福」言説の登場

——「幸福」言説の思想史への序論——

加藤みち子

〈キーワード〉 近代日本／「幸福」／福沢諭吉／中村正直／『西国立志編』／阿部泰蔵／フランシス・ウェーランド／

『修身論』

## 一 はじめに

「幸福」という言葉は日本でいつ登場し、いつ頃から現代のような「幸福感」の意味で<sup>①</sup>使用されるようになったのだろうか。筆者は「幸福」言説をめぐる思想史を構想しているが、本稿ではその第一歩として、日本における「幸福」という言葉の来歴を検討する。なおここでは「幸福」に関連する内容を指示すると認められる用語群「幸福・幸・しあわせ・さいわい」を「幸福」言説と呼ぶこととする。

「幸福」をめぐる議論が、ここ数十年ほど非常に高まりをみせており、人生論、対人関係論から心理学や経済学など多様な分野における幸福をめぐる書物やインターネットサイトが、現在も刊行・閲覧数を伸ばしている。こうした近年の「幸福」言説をめぐるインフレーション的状况に対し、筆者は大きな違和感を覚える。な

ぜ現代人はそんなにも「幸福」というものに熱中しているのだろうか。いったい「幸福」は、そんなにも誰もが求めなければならないものなのだろうか。もう一つ疑問がある。巷にあふれる議論を眺めてみると、多くの議論において、「幸福」の本身は、ほとんどが「幸福感」という感覚（感情）を指しており、なぜその意味で使うのかについて説明がないことも多い。これもまた非常に不可解である。そのような「幸福」の定義はいづろから、自明のことになったのだろうか。

本稿は、現代日本において、自明のものであるかのように議論されている「幸福」に対する、右記のような疑問に基づく問題提起である。提示したいことは二つある。第一は、「幸福を求める」ことは当たり前でも自明でもないということ。第二は、幸福の本身が「幸福感（情）」であるという考え方も、時代を超えた普遍的なものではないということである。つまり、現代の「幸福」は、特定の価値観に基づく一つの立場であるということを指摘したい。なお、現代流布する「幸福」を、歴史相対的に位置づけるという視点は、キャサリン・キングフィッシャー<sup>(2)</sup>氏が指摘しているように、欧米においてはいくつか先行研究がある<sup>(3)</sup>。しかし、日本におけるこうした視点による研究は、管見の範囲ではほとんど見当たらない。

そこで本稿では上記の目標を念頭におきながら、日本語としての「幸福」の来歴の検討を行う。結論から言えば、「幸福」という言葉は、幕末から明治にかけて翻訳語として登場し、近代以降に普及した概念である。そこで、第一に前近代の用例と意味を検討し、翻訳語「幸福」登場前後の状況を確認する。第二に明治初頭において翻訳語「幸福」の使用と流布に重要な役割を果たした三つの著作、すなわち、福沢諭吉著『西洋事情』、中村正直訳『西国立志編』、阿部泰蔵訳『修身論』における「幸福」について検討し、明治初頭におけるその意味を確認する。そして最後に、前近代の用語と翻訳語「幸福」を結びつける辞典類の役割の展望を述べる。

現代日本語の多くが、明治初頭に欧米の言語から翻訳された概念により成り立っているということ、そして、

もともと日本語になかった概念は造語され、その新造語の定着と普及に伴い、欧米の思想が日本にも普及したという事実はよく知られていることである。<sup>(4)</sup>「幸福」という言葉も同様の来歴を持つとするならば、現代における「幸福」をめぐる議論を行う際に、まずは当初の意味とその変遷を位置付けておくことが必要である。したがって、本稿の作業により、現代の「幸福」をめぐる議論に歴史相対的視点を導入する意義があると考える。

## 二 前近代の用例…「幸福」登場前夜

本節では、前近代における用例と、近代における最初の用例などを確認していく。

### (一) 「幸福」という語の初出

「幸福」という熟語は、わが国の前近代においては、和語（やまとことば）<sup>(5)</sup>としても漢語としてもほとんど使用された形跡はない。一七世紀以前に我が国で流布した代表的な字典・辞典類、例えば『和名類聚抄』（一〇世紀）、『節用集』（二五世紀）にも、一七世紀初頭成立の日本語ポルトガル語辞典『日葡辞書』にもその言葉は見当たらない。<sup>(6)</sup>

管見の範囲では、江戸時代後期の読本作者にして文人である、上田秋成（一七三四～一八〇九）の『雨月物語』（一七七六年）に登場するのが最古の用例と思われる。<sup>(7)</sup>

例えば、「上皇の幸福いまだ盡す」とある。これは同物語中「白峯」の中に出てくる言葉である。「白峯」は、歌人・西行が、讃岐国にある在俗時代の主、崇徳院の陵墓、白峯陵に参拝した折、崇徳上皇の亡霊と対面

し、論争するという筋書きである。上記引用箇所の意味は、上皇の運はいまだ尽きていない、というものであるが、この場合の「幸福」は、運（幸運）の意で用いられているといえよう。

その他では、もう少し時代が下り、幕末に編纂された辞書、『諸厄利亜興学小筈』（一八一一年）、及び『諸厄利亜国語林大成』（一八一四年）に稀少な例がある。『諸厄利亜興学小筈』は、長崎オランダ通詞の本木庄左衛門（一七六七～一八二二）が中心となり、幕命により作成された英学書である。本書では「Fortune」の訳として「幸福」の語が記されている。また、同じく本木による英単語集『諸厄利亜国語林大成』では、「Fortune」と「Happiness」に「幸福」が宛てられている。なお、これらの辞書は江戸時代に一般人の目に触れることはなく、幕府の秘書であった。

更に精査すれば使用例を見いだすことは可能であるかもしれないが、以上の調査結果から見て、「幸福」という熟語は、前近代では、ほとんど使用されていない言葉であると結論付けてよいと考える。なお、上記の用例の読みはいずれも「さひはひ（さいわい）」であり、熟語としての「幸福（こうふく）」が明治以降に成立した新しい言葉であることは、ここからも知られるのである。

(二) 「しあはせ（しあわせ）」と「さひはひ／さきはひ（さいわい）」

「幸福（こうふく）」という言葉は、前近代には、ほとんど用例がなかったことをすでに確認したが、現代日本語として、幸福とほぼ同意として用いられる「しあはせ（しあわせ）」、「さひはひ／さきはひ（さいわい）」という言葉は、古来使用されてきた。ただし、前近代の「しあはせ」「さひはひ／さきはひ」は、現代語の「幸福」とは異なる意味を持つ言葉であった。そこで、その意味と用例を確認しておきたい。

「しあはせ（仕合・為合）」とは、動詞「しあはす」の連用形であり、「しあはす」とは、つじつまを合わせ

る、ないし、うまくやりおさせる、という意味の言葉である。

例えば「おのづから仕合はせて点などあれども、新しき物とはみへず」（『連理秘抄』、傍線筆者以下同）と用いる。自然につじつまを合わせ、結果としてうまくやりおさせる、という意味になるわけである。そして、ここから派生した名詞「しあはせ」は、「めぐり合わせ。運命」、「運がよくなること。うまい具合にいくこと」、「物事のやり方。また、事の次第」などと用いられた。

次に「さきは（幸・富・福）ひ」とは、動詞「さきはふ」を名詞化したものであり、「さきはふ」とは「よい運にあう。豊かに栄える。福を齎す」の意味で用いられる。

例えば、「言霊（ことだま）のさきはふ国と語りつき」（『万葉集』）などと用いる。ここで、「さきはひ」の享受者が福や富を得るという面では現代語の幸福に通じるところもあるが、これらを齎す主体は、目に見えない霊力や運の力であるとされている。ここから、「運のいいさま。都合のいいさま」という意味につながっているのである。また類語として、ちはふ（幸ふ／護ふ）という言葉があり、これは「神が霊力を發揮して守ってくださる」ことを指す言葉として用いられる。

以上を整理すると、前近代日本語としての「しあはせ」、あるいは「さひはひ／さきはひ」という言葉は、「良いめぐりあわせにより、運よく」「豊かさや福を齎されている状態」であり、その背後には「神などの霊力が働いている」ということが含意されている言葉であるとみることができよう。

### (三) 「さち」と「ふく」

前近代において「幸福」という熟語こそ見られないが、「さち（幸・獲・利）」と「ふく（福）」という別々の語は存在した。そこで、これらがどのように用いられたのかも見ておきたい。

まず「さち」とは、「海や山でとれる食物。獲物。収穫」を意味し、転じて、獲物をとる道具、または、それがもつ靈力を指す言葉であった。例えば『日本書紀・神代卷』にでてくる「海幸（うみさち）・山幸（やまざち）」がよく知られているが、現代日本語でも「海の幸・山の幸」と用いる。

他方「ふく」とは、「禍（か）」の反対概念である。例えば、『日本靈異記』に「到る所を知らざるが故に、為に福を修す」とある。ただし、「此すずはくらまのふくにてさぶらふぞ」（『古今著聞集』）というように、「ふく」の背後には「くらま（筆者注・鞍馬山の神）」というように、神仏より与えられる贈り物としてよき運がある、という觀念が控えていた。

以上まとめると、「さち」と「ふく」は、食物や獲物、のちには金銀などを持つ豊かさを指す言葉であった。そしてそれを我々が享受するのは幸運によるものであり、「さち・ふく」とは、入手する道具や、それをもたらず神仏に備わる「靈力（ち）」により齎されるものであると考えられていたと解することができよう。

#### （四）漢語：「幸」と「福」

漢語の用例でも、前近代においては「幸福」という熟語の例はほぼ見られない<sup>12</sup>。そこで、「幸」と「福」の原義を概観しておく。

白川静『字訓』によれば<sup>13</sup>、「幸」という文字は、解字すると、「夭…早死に」と「逆…さからう」を組み合わせたものであり「早死にをまぬかれること」を意味する字形である。また、「幸…手枷の象形」であるという説もあり、この場合、「手枷から逃れる」を意味することとなる。以上の意義を反映して、本字の基本となる意味は、「生きながらえること」を内容として、「めでたい、えんぎがよい」、「いかす、あわれむ、めぐむ」の内容をもつて「さいわいする」という文字となる。また、転じて、「したしむ、めでる、いつくしむ。伽には

べらせる、親愛せられる者、めぐみ、たまもの、よろこぶ、このむ、こひねがふ」などの意味も持つが、特筆すべきは「おもいがけなく得たさいわい（僥倖）」、副詞として「都合よく、折よく」の意があることである。すなわち、和語の「しあはせ・さひはい」と同様に、享受者の意図とは関わりなく思いがけなく得られるものが「幸」であることがわかる。

他方「福」という字には「めでたいこと、富、満ち足りる」という意味を持つが、玄意としては、「ひもろぎ（祭祀にそなえた供え物、祭りが終わると人に分け配る）」という意味があり、それが祭祀を通して、「与えられるもの」であったことが見て取れるのである。

以上、本節で見えてきたことをまとめよう。前近代の日本語では、和語・漢語ともに「幸福」という熟語は存在しておらず、関連語である「しあはせ（しあわせ）」・「さひはい（さいわい）」や「さち（幸）」「ふく（福）」では、幸運・僥倖が、その基本的な意味であった。そしてそれは、自ら求めて得るものではなく、享受者の意向とは関わりなく、神仏の霊力や僥倖により「やってくるもの」であることを意味した。

すなわち、現代の幸福論が自明の前提とする「（個人の）幸福感（情）」を「幸福・幸い」という言葉でとらえることや、その言葉でとらえられたものを「個人が求める」という発想が、わが国の前近代の歴史の中に存在しなかったことを確認することができた<sup>14</sup>と考える。

### 三 翻訳語「幸福」の登場

すでに指摘したように、「幸福（かうふく／こうふく）」は、幕末から明治初頭に翻訳語として登場した熟語

であると考えられる。江戸時代にもわずかな用例があるとはいえ、この語は、前近代には一般に周知され使用された言葉ではなかった。

幕末から明治初頭に翻訳語「幸福」の使用と流布に重要な役割を果たしたのは、明六社メンバーを中心とする啓蒙思想家たちであった。明六社は、福沢諭吉（一八三五～一九〇一）、西周（一八二九～一八九七）、加藤弘之（一八三六～一九一六）、森有礼（一八四七～一八八九）、中村正直（一八三二～一八九二）など、当時の代表的知識人を集め、集会を開き、『明六雑誌』を発行して西欧新思想の啓蒙に努めるなど、時代の最先端にある華々しい存在だった。<sup>15</sup> 彼ら、海外の言語や事情に精通した知識人たちが、外来語の訳語を創作し、また旧来の漢語を利用しつつも意味を改変し、例えば「個人 individual」「社会 society」「哲学 philosophy」「芸術 art」などの翻訳語を生み出したのである。<sup>16</sup> そうした翻訳語群の一つとして「幸福」も登場したのである。

とりわけ初期の「幸福」の流布に大きな影響を与えたとみられるのが、福沢諭吉『西洋事情』（一八六六年）、『西国立志編』（サミュエル・スマイルズ著、中村正直訳、一八七〇年）、『修身論』（フランシス・ウェーランド著、阿部泰蔵訳、文部省編纂、一八七四年）である。そこでこれらの用例と意味を検討していきたい。

#### （一） 福沢諭吉著『西洋事情』

『西洋事情』は幕末から明治にかけて三度（一八六〇・一八六二・一八六七年）の渡欧経験のある福沢諭吉が、西洋諸国の政治・風俗・経済などを紹介した書物で、一八六六年に初編三冊、一八六八年に外編三冊、一八七〇年に二編四冊を刊行している。『福沢全集緒言』<sup>18</sup>に記しているところでは、彼の著作の中でもっとも広く読まれ影響力の大きかった書の一つであり、約十五万部、海賊版を数えると二十万部もしくはそれ以上流布したとみられる。

さて、福沢は三部作である本書の「初編」卷之二で、アメリカ独立宣言（一七七六年）を翻訳したが、その中の「Happiness」に「幸福」が当てられている。該当箇所を見てみる。

千七百七十六年第七月四日亜米利加十三州獨立の檄文

天の人を生ずるは億兆皆同一轍にて、之に付與するに動かす可からざるの通義を以てす。即ち其通義とは人の自ら生命を保し自由を求め幸福を祈るの類にて、他より之を如何とす可らざるものなり。（中略）

政府の處置、此趣旨に戻るときは、則ち之を变革し或は之を倒して、更に此大趣旨に基き、人の安全幸福を保つべき新政府を立るも亦人民の通義なり。是れ余輩の辨論を俟たずして明瞭なるべし<sup>19)</sup>（傍線筆者）

なお、原文では「生命、自由および幸福の追求」は、Life, Liberty, and the Pursuit of Happiness. 「安全と幸福」は their Safety and Happiness である。福沢が通義と訳しているのは right（権利）である。

アメリカ独立宣言における「幸福」は、「すべての人は平等に造られ造物主よって一定の譲り渡すことのできない権利を与えられており、その中に、生命、自由、および幸福追求権が含まれている」という人権論の文脈で登場している。このような考え方は、一八世紀に成立した自然権思想に由来し、「個人」が「幸福を求める権利」を有すると主張する、欧米においても新しい概念であった。福沢がこの翻訳によってもたらしたのは、まさにこのような新しい観念としての「個人が権利として求める幸福」であった<sup>20)</sup>。

このような見識に基づく「幸福」の内容は、具体的にはどのようなものであっただろうか。福沢の「幸福」観を後の著作からみてみたい。例えば『学問のすゝめ』（一八七二―七六）の中で、貧困のもとでの平安に満足することを否定して「足るを知るとは他なし。足らざるを知らざりしのみ」と述べる。すなわち、貧しさを自覚して豊かになれるよう努め、「物心ともに高尚に達して」こそ、「真の平安幸福」があるという。つまり「幸福は足らざるを知りてこれを足すの道を求める」ことにであると主張している<sup>21)</sup>。したがって、福沢の提示し

た幸福は、「個人が獲得を求め、べきもの」としての「物心共に高尚に達する」ことを内容とする「幸福」の提示であったとみる事ができよう。

しかし、当時の日本においては、この意味での幸福の前提となる「個人」の観念すら存在していなかった。「個人 individual」、「社会 society」、「権利 right」、「自由 freedom」いずれの観念・思想も持たなかった明治初頭の日本において、個人が求める権利をもち、獲得を求めるべき、とされる「幸福」もまた、先例のない新しい考え方であった。

人権思想すら未成熟であった当時の日本において、その文脈もふくめて福沢の述べる「幸福」が、原意どおりに直ちに理解されたとは考えにくい。しかしながら、真新しい西洋文化の先端的な言葉としてわが国の世上に登場したのであることは間違いない。

(一) サミュエル・スマイルズ著、中村正直訳『西国立志編』

次に、中村正直訳『西国立志編』を見てみよう。本書はサミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles, 1812-1904) の *Self Help* (1859) を一八七〇年に翻訳出版したものである。本書は、西洋の偉人、約三〇〇人余りの伝記を借りて、成功に必要な勤勉、克己、豪毅、節約などを美德として詳しく紹介したものであり、スマイルズの母国イギリスで評判になったばかりでなく、新興国アメリカでも広く読まれ、ヨーロッパ各国の言葉にも訳されたという。日本においては、明治時代だけで百万冊という空前のベストセラーになり、序文の「天は自ら助くるものを助く」で有名な本書は、明治青年の倫理意識や庶民の自立論の形成に多大な影響を与えた。<sup>29)</sup>

本書に登場する「幸福」について、典型的なものをいくつか挙げてみよう。

ラグランジュ、常にその後来名声および幸福を得たることを、わかき時貧困なりしことに帰して「予をし

て、もし富人ならしめば、算学者となることは得ざりしならん」といへり。(第一編十四、七四頁)

しかれども、よく自ら助くるの勢力を發し、安逸と戦いて、これに勝ちたらんには、不幸を転じて幸福なすべし、蓋し安逸と才徳とは両立せざりしものなり。(第一編二十六、八八頁)

一つ目の例では、ラグランジュ (Joseph-Louis Lagrange, 1736-1813) は若い時に貧困であったが努力の結果、数学者として「名声と幸福」を得たという記事である。また、二つ目の事例は、個人の努力によって「不幸」な状況を「幸福」に転じることができるという意味である。本書は、自助努力により成功した偉人の伝記を集めた書物であるから当然といえは当然の事であるが、個人の努力によって「幸福」という成果を獲得できるといふことが提示されているわけである。

しかし、ここで注意を喚起しておきたいことがある。それは本書の基調となるのが、幸福の獲得を目指すことではないという点である。より正確いえば、人々が人生において目指すもののキーワードが「幸福」ではないということである。

本書は、周知のように「天は自ら助くるものを助く」を旗印として、「職事を務め」、「正直、忠厚、節廉」にして、学問や修養に奮励努力することが奨励するのであるが、その結果として得られるものとして力点を置かれているのは、「絶妙極美の地位」「「真実の声名」」「「芳名を不朽」とするといったものである。つまり、当時のキーワードでいえば、「立身出世<sup>23)</sup>」という事になろう。

「立身」とは、元々「立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也」(『孝經』)(身ヲ立テ道ヲ行ヒ、名ヲ後世ニ揚テ以テ父母ヲ顯スハ、孝之終也) から来た儒学の用語で、武士の世界で提唱されたものである。「出世」とは、もともとは衆生を救うためにこの世に現れることや、世間的なものを越えているという意味の仏教の用語で、町人などの庶民の世界で通用されたものである。しかし、明治時代になって、恰も「士農工商」の平等

化を象徴するように、別々だった両者が統一され、四字用語として一般化し、社会的地位の向上や「人生の成功」を意味する時代の合言葉となった。したがって、明治における「立身出世」とは、単なる個人の人生の目標成就というにとどまらず、ただちに「家の誉れ・両親への報恩(孝)」を意味するものでもあった。

また、個々の「立身出世」は国家の繁栄である「富国強兵」をもたらすものとして思念された。一八六八年(慶応四年)三月一四日に発表された新政府の基本方針「五箇条の誓文」には次のような一条が含まれている。「官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス。」つまり国民すべてが各々の「志」の実現に向けて不断の努力を続けるような国家、それが新政府の思い描く近代国家日本のイメージであったのである。ここから、個々人の人生における努力と成功がそのまま国家の繁栄につながると考えられたとみることが<sup>24)</sup>できる。

したがって、この時代、「幸福」という翻訳語が登場し、それは個人が獲得を求めるものであるということ<sup>25)</sup>は紹介されてはいたが、当時の人々が、人生においてその獲得を目指して努力目標とするようものとは認識されていなかった、ということを確認しておきたい。

### (三) フランシス・ウェーランド著、阿部泰蔵訳『修身論』

本書は、現在でこそ前掲の福沢諭吉や中村正直の著作程、有名ではないが、明治初頭における影響力としては看過できない著作の一つである。

阿部泰蔵訳『修身論』は、フランシス・ウェーランド (Francis Wayland, 1796-1865) の *The Elements of Moral Science* (『道徳科学要論』、一八三五年) の縮約版の訳書の一つである。この書は、アメリカの各大学や高等教育機関で指定教科書として採用され継続して三〇年以上も人気を博したという。

日本などに普及したのは一八六五年の四訂版（決定版）である。また、ウェーランド自身が同書の初版刊行と同時期に中学校や専門学校での使用を想定し、要点をまとめた縮約版を上梓した。阿部泰蔵の修身論は、この縮約版からの訳書である。ウェーランドの縮約版は阿部の訳書のほかにも、山本義俊『泰西修身論』、平野久太郎『修身学』など数種類の翻訳書<sup>(26)</sup>があり、福沢諭吉の『学問のすゝめ』にも深い影響を与え、明治初期に一大ブームを巻き起こした<sup>(27)</sup>というが、数ある訳書の中でもっとも普及したのが阿部泰蔵訳の『修身論』（文部省編纂、一九七四年刊）であった。

一八七二年学制公布とともに企画され、当時できたばかりの文部省に奉職していた阿部泰蔵（一八四九〜一九二四）は、修身学の教科書として本書を翻訳した<sup>(28)</sup>。本書は一八七四年から七七年まで各地の小学校で普及したほか、活字に組まれたものなど民間による翻刻出版が一八八二年ころまで続いたという。小学校以外でも広く読まれたとみてよい。

本書の第一部第四編が「幸福<sup>サイハヒ</sup>ヲ論ス」となっており、明治初頭に普及したある程度まとまりをもった幸福論の嚆矢とみられるので、その内容を確認していきたい。

夫我造物ノ神人ヲシテ人世積々ノ目的ヲ成達セシメンカ為則チ種々ノ企望ヲ賦与シテ人ヲ造レリ 此ノ企望ノ満足ヲ幸福或ハ愉快ト云フ 今下條二説ク所ハ悉ク此ノ幸福愉快ノ事ニシテ看者宜シク茲ニ説ク所ノ意味ニ注意スベシ（中略）是ヲ以テ人々財用ヲ節シ其有餘ヲ以テ他人ノ愉快ヲ満足セシムルノ事件ニ用イルナラ何ソ之レニ由テ我真成最大ナル愉快ヲ生ズルコトナラランヤ故ユエニ曰ク人ハ慢リニ我一身ノ愉快ノミ謀ラズ善ク熟考シテ真成最大ナル幸福ヲ求ム可シト。<sup>(30)</sup>

ここで阿部が、「幸福或ハ愉快」と訳しているのは、Happinessである。そして、「企望ノ満足」すなわち人々の欲望を満たすことが幸福であると説明がなされている。すなわち、ここで明確に個人の欲望の充足や快

楽（愉快）を内容とする「幸福」が提示されているとみてよいだろう。

ただし、筆者は「幸福或ハ愉快」を、単なる個人の感覺的欲望の充足にて事足りりとしているわけではない。四種、すなわち、「意感の愉快（食欲・飲樂・音楽・五色・景色の五感覺で樂しむ）」、「才知の愉快（書籍を讀み才識を長じ詩を賦し弁を巧みするを以て樂しむ）」、「親睦の愉快（親族朋友の親睦なるによつて樂しむ）」、「修身学の愉快（徳を修め善を行つてこれがために我が幸福を導く）」を提示したうえで、第四の修身学の愉快を求めるのが、「真成最大ナル幸福」であると位置付けている。そして、修身学の愉快とはただ「我一身ノ愉快ノミ謀ラズ」、「人々財用ヲ節シ其有餘ヲ以テ他人ノ愉快ヲ満足セシムル」という利他実践にあるというのが、本書の幸福論の主旨である。

フランシス・ウェーランドの *The Elements of Moral Science* は、直訳すれば『道徳科学要論』であり、理性的に科学としての道徳を説く著作である。ウェーランドが本書を執筆したのは、一九世紀の欧米諸国で普及しつつあった、因果的推論や帰納的思考態度に基礎を置く「科学的方法」が普及していた時代であった。ウェーランドは、信仰と科学は両立できるとする立場で本書を執筆している。したがつてその幸福論も、個人の欲望に負けず、節度ある生活をおくるべき必要性を理論的に展開する道徳論的幸福論となっている。そしてその背景には、個人主義・民主主義・自由主義に基づく、米国市民社会の理想が貫かれていた。

また、ウェーランドは、アメリカバプテスト派教会の牧師であり、その道徳論・幸福論の背後には、キリスト教的造物主としての神が確固として存在する。例えば「神ハ人ヲシテ愉快ヲ受得セシメ之ニ由テ幸福ヲ造作増加セシムルコト較然トシ著名ナリ」というように、人の幸福は造物主たる神の御心によるものとなっている。これに対し、阿部訳『修身論』は、明治政府編集発行の小学校における「修身学」の教科書として翻訳発行を準備されたという性格上、キリスト教の影響については、極力削除すべく務めた形跡がある。例えば、キリ

スト教信仰に関する部分は訳出していない。具体的には、前編第五（良心の不完全性・未開人は神の法を知らない）・第六（自然宗教の欠点・死後・罪の償い・キリストについて知り得ない）・第七（啓示宗教・聖書の教え・神の法・イエスの生涯）および、後編の第一（神様・その性質・掟・愛する義務）・第二（祈祷・お祈りする習慣の義務。人間は罪人）・第三章（安息日の厳守）は省略している。また、それ以外の部分で登場する、キリスト教の「神の国」はすべて「天」と訳するなど、キリスト教色をなくすべき工夫がなされている。<sup>11)</sup>

このように、阿部訳『修身論』を理解する上では、ウェーランドの思想の完全なる紹介の書ではなく、明治政府の推奨する当該時代日本の動向に適合するような翻案がなされていたということを考慮する必要がある。

また、阿部訳で、タイトルを『修身論』として翻訳したことも看過できない。修身学の「修身」とは「個人の道徳」にとどまるものではないからである。この語は、朱子学の古典である四書五経の一つ『礼記大学編』における「修身・齊家・治国・平天下」の考え方を反映する概念であり、天下を治めるには、まず自分の行いを正しくし、次に家庭をととのえ、次に国家を治め、そして天下を平和にすべきである、という発想がある。つまり「修身」の語には、「個人と家と国」の繁栄や達成を「一連のもの」と考える構造が含意されているのである。したがって、この時期の「修身論」の文脈で提示される「幸福」は、一見、出世や名譽の獲得という、個人の栄達であつても、決して、孤立した個人や、家（核家族ではなく一族）や国と切り離された、個人のみ  
に帰するものではありえなかった。

以上、明治初頭に翻訳語「幸福」を流布させたとみられる三冊の書物について検討した。翻訳語「幸福」は、福沢諭吉・中村正直・阿部泰蔵らが、サミュエル・スマイルズ、フランシス・ウェーランドなど欧米思想の翻訳過程において訳語として用いることで、日本語として次第に普及したものと見てよいだろう。しかしながら、翻訳語が導入されたといつて、直ちにその概念が、そのまま原意どおりに理解・受容されたわけではない。ま

た、翻訳のプロセスにおいて明治政府の方針に合わせて改訳された部分もあった。すなわち、そこに提示されているのは、明治啓蒙思想家による明治期の国家的理想に裏打ちされた「幸福」イメージであったのである。

(四) 「幸福」、「幸」と「さいはい・しあわせ」の結びつき

前項で明治初頭の啓蒙思想家たちによって、翻訳語「幸福」とともに、個人の立身出世・修身論と結びついた「幸福」概念が提示されたと述べたが、その思想と、和語の「さいわい」や「しあわせ」はどのように結びついたのでろうか。この点については、綿密な考証が必要となるので、詳細は別稿に譲るが、展望として、辞書の普及と文学作品等における、「ルビつき幸福」の用例を提示しておきたい。

明治初頭の二大ベストセラーは、福沢諭吉『学問のすゝめ』(一八七二)と中村正直『西国立志編』(一八七〇)等であったが、これらの書物がベストセラーとして多数の読者を得るのと並行して、明治期に作成された漢語辞書・訳語辞典の類は約数万といわれる。<sup>(32)</sup> その中に江戸時代の字書にはほとんど全くなかった「かうふく(こうふく)」の読みを伴う「幸福」の字が一斉に登場するのである。そして、そこに記される意味は「しあわせ」か「さいわい」であった。その一部を紹介する。<sup>(33)</sup>

- 一八六九年(明治二) 『漢語字類』 字「幸福」 読み「カウフク」 意味「シアワセ」
- 一八七〇年(明治三) 『新撰字類』 シアハセ (※以下、意味のみ記す)
- 一八七二年(明治五) 『新撰字解』 シアハセ
- 一八七三年(明治六) 『世界節用無尽蔵』 しあわせ
- 一八七四年(明治七) 『新撰字解』 シアハセ

『大増補漢語解大全』 サイハヒ

- 『訳書字解・漢語新選』 シアハセ
- 『増補新撰字類』 しあはせ
- 一八七五年(明治八) 『大全漢語字彙』 シアハセ
- 『普通漢語字引大全・布令新聞新撰校正』 シアハセ
- 一八七六年(明治九) 『小学読物熟字解』 さいはひ・イイシアハセ
- 『開化節用集・音画両引』 ネガフサイハヒ・サヒハヒ
- 『万通字類大全』 シアハセ
- 一八七七年(明治一〇) 『漢語日用弁』 シアハセ
- 『御布令新聞漢語必要文明いろは字引』 サイワイ
- 一八七八年(明治一一) 『布令必用普通漢語解・掌中両引』 サイハヒ
- 一八七九年(明治一二) 『新撰伊呂波字引』 サイハヒ
- 『必携熟字集』 サイハヒ
- 一八八〇年(明治一三) 『布令新聞日誌必用新撰校正普通漢語字引大全』 シアハセ
- 一八八一年(明治一四) 『漢語字引集』 シアハセ
- 一八八二年(明治一五) 『明治いろは字引大全』 サイハヒ
- 一八八二年(明治一七) 『新撰漢語字引大全』 シアハセ
- 『新撰普通漢語字引大全』 サイハヒ
- 一八八七年(明治二〇) 『漢語新画引大全』 サイハヒ
- 『漢語いろは字典』 サイワイ

一八八八年(明治二一)『新撰漢語字引』 シアハセ

『新撰漢語字引』 シアハセ

一八八九年(明治二二)『広益漢語伊呂波字引』 ヨキサイワイ

一八九二年(明治二五)『漢語大字典・熟字伊呂波引』 サイワイ

一八九四年(明治二七)『新撰漢語字引・改訂音訓』 シアハセ

一八九六年(明治二九)『明治漢語字典』 シアハセ

一九〇四年(明治三七)『新編漢語辞林』 サイハヒ

一九〇六年(明治三九)『作文新辞典・漢語国語』 しあはせ さいはひ

なお、右記のうちのいくつかの辞書で「幸然」カウゼンを「サイハヒ」とし「幸福」を「シアハセ」と使い分けている。また「幸」は「ねがう」で、幸福は「福を願う」とも解されている。新語である「幸福」の意味の不安定さが見えて興味深い。

以上の辞書類が、「幸福」を、和語「さひはい／しあわせ」に結び付ける上で重要な役割を果たしたとはたことは言うまでもないが、実際に、日本語としての定着を進めたのは、「ルビつき幸福」の使用であると考えられる。事例を挙げてみる。

・『おつ魂消えたく、危なく生命を棒に振る處だつた。』と流石の武村兵曹も膽をつぶして、靴無き片足を撫で、見たが、足は幸福(さひはい)にも御無事であつた。<sup>(36)</sup>(一九〇〇年)

・夫人は返す返す再会を約して手を握られた。自分達三人は馬車の上でどんなに今日の幸福(さひはい)を祝ひ合つたか知れない。<sup>(37)</sup>(一九一四年)

右の事例では、いずれも、幸福に「さひはい」のルビをつけて使用されているが、ここでいう幸福(さひはい)

ひ)は、「幸運」の意味で用いられていることがわかる。「幸福」が和語「さひはひ」の事であるという認識が、普及していったことが読み取れる事例である。

一八七二年、わが国では学制が導入されたが、明治二〇年代半ばまでは学校教育普及が低迷しており、漢字を読める日本人は多くなかった。その中で漢字読解率を高めるのに貢献したのは、義務教育と、総ルビ(すべての漢字によみがなが付されている)の新聞であるといわれる。また新聞掲載の大衆小説が当時の民衆の重要な娯楽の一つであったことなどを考えると、以上のような「ルビ付き幸福」の使用により「幸(福) 〓 さひはい／しあわせ」が我が国に定着していったとみることは見当はずれではあるまい。

#### 四 おわりに

以上、前近代の日本語にはほとんど存在しなかった「幸福」という言葉が、翻訳語として明治初頭に導入定着された前後の状況を概観した。

翻訳語「幸福」は、前近代日本における「しあはせ(仕合せ)」、「さひはひ(さきわい)」の持っていた意味すなわち、「運、偶然的に訪れるもの、神からの僥倖としてもたらされるもの」というそれとは異なる意味を含むようになる。すなわち、西欧近代、さらに言えば、啓蒙思想の観念を背負った「幸福」であった。

しかし単に西欧近代思想の文字通りの輸入であったわけではない。明治初頭において「幸福」を含むフレーズで推奨された人生の目標は、むしろ「立身出世」であった。この時代には、幸福よりも「立身出世」のほうが、重視され積極的に鼓舞され普及された概念であった。また、その「立身出世」も、個人にとつての目標に

とどまらない、家の繁栄であり、国の発展繁栄―富国強兵と一連のビジョンであった。

なお、本稿では言及できなかったが、ここで形成された幸福観が、その後の時代にそのまま継承されるわけではない。明治末期から大正時代にかけて、わが国における最初の「幸福」ブームが到来し、新たな局面が展開する。すなわち、「幸福」をめぐる状況もその解釈も時代によって変遷してゆくのである。

また、「幸福」は、わが国では明治時代に翻訳語として基盤を作り普及した概念であるが、西洋近代においても一八世紀以降（啓蒙思想・アメリカ独立宣言）に成立した「新しい」価値観である。そもそも、幸福のイメージは文化圏によって異なり、幸福との向き合い方もまちまちで、時代により変化もする。つまり、「幸福」とは人間が本来備えている特性とか自明の人類普遍のものではないのである。したがって、「幸福」をめぐる議論には、歴史相対的視点が必要なのである。

本稿では、「幸福」言説の思想史の冒頭をわずかに素描し、問題提起をしたに過ぎない。詳細については、時代やジャンルを絞って個別の実証的な議論を重ねていくことが不可欠である。とりわけ、現代にもつながるさまざまな「幸福」論の潮流が台頭するのは大正時代であり、この部分の検討は欠かせないが、稿を改めて論じることとし、ひとまず擱筆することとしたい。

## 註

- (1) ここでいう現代のような意味とは具体的に「主観的幸福感」を念頭に置いている。二〇一〇年内閣府により幸福度に関する調査研究をするため有識者による研究会が立ち上げられた。<https://www5.cao.go.jp/keizai2/koufukudo/pdf/konkyo.pdf> (1)で幸福度とは「主観的幸福感」であると定義されている。世界的にはこのような定義の登場は、一九七三年、ブータン王国で国民総生産に対する批判として導入された国民総幸福量指数という概念を契機とし、二〇一二年から国連で

世界幸福度の調査を始めたことが背景にある。(Helliwell, John; Layard, Richard; Sachs, Jeffrey (April 2, 2012). *World Happiness Report*. Columbia University Earth Institute)

- (2) キャサリン・キングウィッチャー著、浅井彩・国広伽奈子訳、「幸福とは何か―歴史・文化・ガバナンスをめぐる人類学的考察」(『人文学報(社会人類学分野)』五一―二二号、首都大学東京人文学研究科、二〇一七年)、また、キングウィッチャー自身、現代的な幸福を自明とする立場から一線を画し、人類学的視点から現代西欧の「幸福の文化」への批判的検討をすすめている。
- (3) Macpherson, C., & Macpherson, L.2009 *The warm winds of change: Globalization in contemporary Samoa*. Auckland University Press, McMahon. D.M.2010 What does the ideal of happiness mean? *Social research* 77(2): 469-490.
- (4) 柳父章『翻訳語成立事情』岩波書店、一九八二年、丸山真男・加藤周一『翻訳と日本の近代』岩波書店、一九九八年参照
- (5) 和語とは、倭語・大和言葉とも言い、漢語や外来語に対する日本の固有語を指す。その語彙には、漢語の意味も含まれることがある。鳴海日出志『和語と漢語』北海道出版企画センター、一九九六年、白川静『新訂字訓』平凡社、二〇〇七年
- (6) 乾輝雄編『日本における辞典の歴史』辞典協会、一九六九年
- (7) 上田秋成『白峯』『雨月物語』(日本古典文学大系『上田秋成集』岩波書店、一九五九年)なお、本件は、国文学研究資料館の、日本古典文学大系・古典選集・嘶本大系の各本文データベース検索の結果によるものである。(https://www.njil.ac.jp/search/find/#database)
- (8) 本木正栄等編譯『諸厄利亜語林大成 大槻本(一八一四年刊)』(日本英学史料刊行会(編)、『長崎原本「諸厄利亜興學小筈」「諸厄利亜語林大成」研究と解説』大修館書店、一九八二年所収)
- (9) 幕末から明治においては旧かなづかいが使用されていたので、ここでは旧かなづかいにて表記し、読みをカッコ内に記す。
- (10) 本項以下和語の意味と用例は、特に説明の無い場合は、中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典』(角川書店、一九九九年)、『時代別国語大辞典・上代編』(三省堂、一九六七年)、『時代別国語大辞典・室町時代編』(三省堂、一九八五年)による。
- (11) 漢語とは、古代中国語に由来するが、前近代において、漢字音のまま日本語として用いられた言葉を指す。上代から中世にかけて体系化された呉音と漢音、およびこれ以降に伝来した唐宋音を反映した語彙体系のことをいう。
- (12) 一〇六〇年刊の史書『新唐書』に熟語「幸福」の初出との説があるが、本稿では中国語の問題には立ち入らない。(諸橋

- 徹次編『大漢和辞典』大修館書店、一九四三年)
- (13) 白川静『字訓』平凡社、一九八七年、三五六頁
- (14) *Oxford Dictionary of Word Origins*, 2010, Oxford University Press によれば、Happy の語源は Happ (happen state) であるという。つまり幸福に関する、僥倖的なもの、という捉え方は、日本や東洋に限らず、前近代社会に共通であったとみることできる。
- (15) 大久保利謙『明六社』講談社学術文庫、二〇〇七年参照。
- (16) 「個人」「社会」「自由」「権利」については福沢諭吉「学問のすゝめ」、「哲学」「芸術」については西周の『百一新論』(一八七七年)参照。
- (17) 『西洋事情』、慶應義塾大学出版会、二〇〇九年、三五〇頁
- (18) 明治三二年版「福沢全集」(全五巻、時事新報社刊)の第一巻に掲げるために執筆されたもの。一八九七年刊
- (19) 「アメリカ独立宣言」(福沢諭吉訳・原文対照)『翻訳の思想』日本近代思想大系、岩波書店、一九九一年、三七頁
- (20) アメリカ独立宣言の「幸福追及」がどのような意味を持つかについては、建国者により、多様な使い方がされており、人間の幸福・国家の幸福・社会の幸福・公共の幸福など、どれか一つ収斂するものではないとされる。(団上智也「アメリカ独立宣言における「幸福追求」の意味」『法政治研究』第四号、二〇一八年)
- (21) 『福沢諭吉選集』岩波書店、一九八〇年、第三巻、二八三―二八四頁
- (22) 藤原暹『日本における庶民的自立論の形成と展開』ペリカン社、一九八六年参照
- (23) 前田愛「明治立身出世主義の系譜―『西国立志編』から『帰省』まで」(一九六五年初出、『近代読者の成立』岩波現代文庫、二〇〇一年所収)
- (24) 「立身出世」と「富国強兵」の結びつきについては、傳澤玲「明治三〇年代における立身出世論考―『成功』を中心に」参照。「身を立て、名を挙げる」ことが単純に個人のためではなく「家」の誉れであるという構造については、竹内洋「立身出世主義のロマンと欲望 増補版」世界思想社、二〇〇五年参照。
- (25) Francis Wayland は、アメリカのバプテスト派の牧師であり、アメリカのブラウン大学の学長を二十八年務めた思想家・教育者・経済学者である。一九世紀の経済学に巨大な影響を与えた *The Elements of Political Economy* の著者として世界史に名を残した。

- (26) 海俊宗臣『海俊宗臣著作集』第三巻、東京書籍、一九六一年)所収「修身教科書総目録一」によれば、一八七三年から一八八二年までに十一種の翻訳が作成された。当時の日本には多数の原書が持ち込まれていたが、ごく短期間に何種類もの翻訳書や関連書物が相次いで出現したことは珍しい現象であり、関係者はウェーランドブームと呼んでいる。
- (27) 藤原昭夫『フランシス・ウェーランドの社会経済思想…近代日本、福沢諭吉とウェーランド』日本経済評論社、一九九三年。
- (28) 維新政府により文部省が設置されたのは一八七一年(明治四)年である。
- (29) 本書の成立と普及については、アルベルト・ミヤン・マルティン『修身論』の「天」慶應義塾大学出版、二〇一九年参照。
- (30) 阿部泰蔵『修身論』前編、松村書店、一九七三年(国立国会図書館デジタルコレクション所収)
- (31) 本書における、キリスト教要素の排除に関しては、アルベルト・ミヤン・マルティン『修身論』の「天」(慶應義塾大学出版、二〇一九年)に詳細に論じられているので参照されたい。
- (32) 沢村修治『ベストセラー全史 近代編』筑摩書房、二〇一九年
- (33) 明治期に刊行された字書・辞書については近代デジタルライブラリー(現・国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/>)によった。
- (34) なお、筆者は国立国会図書館で参照可能な約三十冊のみ確認した。
- (35) 西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』至文堂、一九六一年、山本武利『近代日本の新聞読者層』叢書現代の社会科学、法政大学出版局、一九八一年
- (36) 『海島冒険奇譚 海底軍艦〇五』初版一九〇〇年。押川春浪(一八七六―一九一四)著。明治時代に流行した冒険小説。(インターネット電子図書館青空文庫、[www.aozora.gr.jp](http://www.aozora.gr.jp/)より引用)
- (37) 『巴里より』初版一九一四年、与謝野寛、与謝野晶子(一八七八―一九四二)著、インターネット電子図書館青空文庫、[www.aozora.gr.jp](http://www.aozora.gr.jp/)より引用)
- (38) 一八七二(明治六)年に、学制が發布されても、国民の多くは自分たちの子供をすぐには小学校へ通わせなかった。当初、小学校の就学率は三〇パーセント程度、通学率に至っては二〇パーセント程度であったという。なお、明治の中頃には小学校の就学率は五〇パーセント(通学率は三〇パーセント)を越え、明治の末頃には一〇〇パーセント(通学率は九〇パーセント)に達した。

セント) 近くに達した。(高橋敏『近代史の中の教育』岩波書店、一九九九年)

(武蔵野大学特任教授 博士(哲学)、公益財団法人中村元東方研究所主任研究員)